

あつた。途中、問題にしている森鷗外『百物語』は、森銑三に考証がある。私自身は、明治の風俗、とりわけ文化人たちの怪談ブームの中でとらえる見方もあるのではないかと考えている。

本書は概ね、冒頭に述べられた柳田理論に対する批判の趣をなし、各章で立ち上げた問題提起はそれをしなやかに越えてゆく試みとしてある。戦後の昔話研究における第二世代を形成した一人、著者ならではの世界が、確固たるものとして存在している。二一世紀へ向けて、昔話の面白さと昔話研究の可能性を開いてくれる、橋渡しとなる本であることは間違いかろう。

その際に、この本で積極的に持ち込んだのは、折口理論ではなかつたか。1章の「山中異童子の賣姿」(六四頁)、3章の「安らぎを得ぬ未完成靈」(一二七頁)、8章の「非業の死を遂げた者への積極的な慰藉」(二九〇頁)といった重要な読みは、はつきり名前の出ていない場合もあるものの、そこに影を落とすのが折口であることは自明だろう。しかし、私には、昔話の読み取りと折口理論との間に、やはり間隙があるように思われてな

らない。もう少しそこを埋める言葉がほしいと思つた。

この本の充実した意義を認めつつも、なお申し上げたいいくつかの点には、誤解もあり、無い物ねだりもあるかもしれない。だが、遙かに遅れてきた後学世代の一人としては、違和感を隠さずに読みぬきたいといふ、切実な

思ひがある。昔話研究の大きな転換期にあって、そうした嘗みをゆるがせにしたところから、次の新しい研究は始まらない。そう思われるからだ。著者ならばに読者には、ご寛容のものでこれをお読みください幸いである。

(大修館書店・本体二五〇〇円)

## 書評

石井正己著

### 『絵と語りから物語を読む』

根岸英之

#### II

本書は、口承文芸分野において柳田国男を

初めとする昔話資料集の「文献学的研究」を精力的に進めている石井正己氏が世に問うた最初の単著である。一九八八年から九年までに既発表論文と書き下ろし論文から成る。

#### III

目次の構成は以下の通り。

さかさ語り論

琵琶法師と犬—琵琶法師の図像学(1)—

琵琶法師の演唱—琵琶法師の図像学(2)—

胡弓を弾く盲僧

能の語りと伝説

庄内の鳥羽絵

サムトの婆の来る家

山口孫左衛門家の盛衰

あとがき

『源氏物語』の世間話

『源氏物語絵巻』の宇宙

『宇治拾遺物語』にみる昔話の論理

『源氏物語』に始まつて能や鳥羽絵、さら

て幾分戸惑いを感じないではないが、その意

には『遠野物語』にまで説き及ぶ構成につい

て図するところは、「あとがき」に次のように

ある。やや長くなるが、本書の目指すところ

が端的に述べられているので、引用しておく。

口承文芸の様相を見い出そうとした論文が集められている。

これは、日本文学の時代とジャンルの区分を越えて、「物語」とは何かを追究した一つ

の試みである。さらに言えば、ここでは文学

のみならず、宗教、芸能、音楽、図像なども

密接に関係してくる。そのため、「物語」を

立ちあがらせる方法も一様ではない。絵巻に

入り込まなければ見えない場合もあれば、聞

き書きに拠らねば明らかにできない場合もあ

る。こうした文献解説とフィールドワークと

の往復運動の中ではじめて見えてきた、日本

の「物語」の風景がここには描いてある。や

や荒削りなラフスケッチに見えるかもしけな

いが、こうした絵を描ける者は他にいないだ

ろう、という程度の自負はある。……専門化

というよりはむしろ、細分化が急速に進む現

社 一九九〇）に初出。

〔『源氏物語絵巻』の宇宙〕は、『源氏物語

代において、『源氏物語』から『遠野物語』までを論じようとしたこの本は、やや暴力的とも言える、異端の書かもしれない。（二八〇

一二八一頁）。

I 古典文学を題材とした口承文芸研究

以下、各章ごとに概観していく。

I は古典文学を題材に採りながら、そこに

口承文芸の様相を見い出そうとした論文が集められている。

〔『源氏物語』の世間話〕は、新たな世間話

研究の動向に触れながらも、「何か変わった

ことはないか」という奇事異聞を中心とする

世間話の視点に立つて『源氏物語』の語り

のあり方を論じたもの。雨夜の品定めの場面

から、物忌みの夜に光源氏に招かれて物語を

上げ、宮廷における物語の場の具体像を表現

として捉えようとするもの。ここでの物語と

は、世間話や雑談、噂などに対応する。「雪の

いと高うはあらで」の章段から、火桶や炭櫃

を中心自由な物語の場が展開されていたら

うことを読み解き、「頭中将の、すずらなる

奇事異聞を中心とする世間話に該当する口頭

伝承の形態として捉えることができるとする。

『説話の講座2 口承・書承・媒体』（勉誠

本文学）第41巻第5号（一九九一 日本文学

物語』の本文と比較することにより、絵巻の読み解けるかを提示しようとする。『源氏物語』は声にして読むのにふさわしい文体をとによって作り出されたテクストの世界をどう読み解けるかを提示しようとする。『源氏物語』の本文と比較することにより、絵巻の詞書は声にして読むのにふさわしい文体を持っていること、その語りは、絵巻の中に描かれた女房たちが耳にしたことを語るように作中世界の語り手が構造化されているのではないかといつたことを指摘する。本論は書き下ろしである。

〔『物語と『枕草子』〕は、『枕草子』を取り上げ、宮廷における物語の場の具体像を表現として捉えようとするもの。ここでの物語と

は、世間話や雑談、噂などに対応する。「雪の

そらごとを聞きて」の章段から、物忌みの夜に

男性貴族たちが宿直所で女性談義に花を咲かせる様子を読み取る。また、「けり」を用いて語られる回想談の分析からは、定子後宮における宫廷伝承の存在を指摘する。初出の『日

協会)は「都市伝承」をキーワードにした特集であり、本論はそうした側面も持つ。

『宇治拾遺物語』にみる昔話の論理は、話型の比較研究に急速あまり個々の話を一話として読むことが疎かになつてはいないかと

いう批判のもと、『宇治拾遺物語』中の「鬼に瘤取らるる事」「雀、報恩の事」「長谷寺参籠の男、利生に預かる事」「東人、生贊を止むる事」の四話を取り上げ、具体的表現の分析を

通して個々の話の持つ意味を読み解く。「話型」という近代の学問が作り上げた制度に回収されることを拒む、個々の話の声に耳を傾げてみたい」の一文が胸を突く書き下ろし論文である。

Ⅰは、最後の『宇治拾遺物語』以外は、一般的な口承文芸研究からはやや距離感の持たれる題材を扱っているといえよう。しかし、『源氏物語』研究が膨大なへ「読み」による「語り」研究の蓄積を生んでいることは口承文芸研究にとっても無視すべきものではないし、『枕草子』においても、同様の研究がなされている。当然、これらは書かれた表現の世界であり、口承文芸研究にダイレクトには返って来るものではない。決して、『源氏物語』の物語の場の世界が、当時の貴族社会

の物語の場そのものの実態的記録であるわけではないからだ。ただ、こうした研究から、逆にわれわれは、古典作品の持つ物語の記述の豊かさに気づかざるはずだ。近代の学問としての口承文芸研究が、いかに物語の場を無視した話のみの比較研究に終始して来たかが、本書を読むことによって見えて来ると言えよう。

## Ⅱ 芸能を題材とした口承文芸研究

Ⅱは、琵琶法師や能といった芸能を題材に扱った論文が集められている。

「琵琶法師と犬—琵琶法師の図像学(1)」

は、副題にあるように、図像に描かれた犬に吠えられる琵琶法師の「表現上」の歴史的展開を論じたもの。実際の光景から図像や説話されるべきとする。しかし、芸能などに類型化されていく様相が鮮やかに示される。初出は、『学芸国語国文学』第23号(一九九一) 東京学芸大学国語国文学会。

「能の『語り』と伝説」は、まず柳田国男の伝説観について、旅人の心を動かすような名のあるもののいわれを伝説と概念規定しようと書いていたと指摘し、それは、能において、諸国一見の僧が旅先で見た「物」の由来を尋ね、出来事にゆかりのある者によつてそのいわれが語られる構造と相似しているのではないかとする。また、能における『語り』を開いたと指摘し、それは、能において、能に分類し、その特徴を抽出する。そして、能カタリ／＼型とヘクリ／＼サシ／＼クセ／＼型との対比を示す。初出は、『能の『語り』と伝説』(一九九二) 東京学芸大学国語国文学会。

「口承文芸研究」第19号(一九九六)。

「琵琶法師の演唱—琵琶法師の図像学(2)」は、琵琶法師が演唱する図像を取り上げ、二人のつれ語りの歴史的展開や用いられる樂器の在りようなどが追究される。『平家物語』研究と批評(一九九六 有精堂)に初出。最も緻密に分析が施された好論である。

「胡弓を弾く盲僧」は、文献において胡弓

が盲僧と密接に関係したものであることを確認した後、宮城県と岩手県での聞き書きを通じて、同地方の盲僧が、胡弓の芸以外に、早物語や昔話などの伝承にも関与していたことを示す。初出は、『口承文芸研究』第11号(一九八八)。

「能の『語り』と伝説」は、まず柳田国男の伝説観について、旅人の心を動かすような名のあるもののいわれを伝説と概念規定しようと書いていたと指摘し、それは、能において、諸国一見の僧が旅先で見た「物」の由来を尋ね、出来事にゆかりのある者によつてそのいわれが語られる構造と相似しているのではないかとする。また、能における『語り』を開いたと指摘し、それは、能において、能に分類し、その特徴を抽出する。そして、能カタリ／＼型とヘクリ／＼サシ／＼クセ／＼型との対比を示す。初出は、『能の『語り』と伝説』(一九九二) 東京学芸大学国語国文学会。

「口承文芸研究」第19号(一九九六)。

「琵琶法師の演唱—琵琶法師の図像学(2)」は、琵琶法師が演唱する図像を取り上げ、二人のつれ語りの歴史的展開や用いられる樂器の在りようなどが追究される。『平家物語』研究と批評(一九九六 有精堂)に初出。最も緻密に分析が施された好論である。

### III さまざまな形態の物語を読む

IIIは、前章までに入らない以下のようないい論文から成る。

「さかさ語り論」は、主に座頭によって語られたさかさ語り（早物語）を取り上げ、さかさ語りは、単なる滑稽な語りというだけでなく、ありえないことが起こり得るという奇瑞を語る信仰的側面もあるとする。また、現代の中学生や海外でも行われていることを紹介しながら、教育的配慮のある通過儀礼の文學としての側面もることを指摘する。初出は、『山形の民話』第103号（一九八九 山形民話の会）。

「庄内の鳥羽絵」は、山形県で活躍した土屋鷗涯（一八六七—一九三八）の活動を取り上げ、彼の残した画帖に見られる豊富な口承文芸を題材にした作品について言及する。初出は、『学芸国語国文』第25号（一九九三 東京学芸大学国語国文学会）。

「[サムトの婆]の来る家」は、『遠野物語』の「サムトの婆」と、佐々木喜善の記した「妖怪」の関係について論じたもの。『遠野物語』の「サムトの婆」と、佐々木喜善の記した「茂助婆様」を比較し、『遠野物語』のそれは、民俗社会のありようを知るための伝承の

叙述としてはやや限界があるとし、喜善のそれを分析対象とする。そして、この話を茂助「家」の「神」が祀られなくなることではかさ語りは、単なる滑稽な語りというだけでなく、ありえないことが起こり得るという奇瑞を語る信仰的側面もあるとする。また、現代の中学生や海外でも行われていることを紹介しながら、教育的配慮のある通過儀礼の文學としての側面もることを指摘する。初出は、『山形の民話』第103号（一九八九 山形民話の会）。

「村」の「神」が誕生する物語であると読む。初出は、『古代文学講座3 都と村』（一九九四 勉誠社）。

「山口孫左衛門家の盛衰」は、『遠野物語』の「遠野物語」説などを評価したい論文として読んだ。

「遠野物語」の特徴が見えて来るだけでなく、再話や聞き書きの問題などにも思いを致させてくれる内容となっている。初出は、『遠野常民』第11号（一九九三 遠野常民大学）。

「遠野物語」の特徴が見えて来るだけでなく、再話や聞き書きの問題などにも思いを致せてくれる内容となっている。初出は、『遠野常民』第11号（一九九三 遠野常民大学）。方法の違いを明らかにしようとした論文。『遠野物語』の特徴が見えて来るだけでなく、再話や聞き書きの問題などにも思いを致せてくれる内容となっている。初出は、『遠野常民』第11号（一九九三 遠野常民大学）。方法の違いを明らかにしようとした論文。『遠野物語』の特徴が見えて来るだけでなく、再話や聞き書きの問題などにも思いを致せてくれる内容となっている。初出は、『遠野常民』第11号（一九九三 遠野常民大学）。

IIIは、評者なりに統一テーマを付けようとしましたが叶わなかった。一編一編はそれぞれ注目すべき指摘が散見するが、全体としてややつながりのつかみにくい章となっているように思われた。

IV 全体を通して

本書は、冒頭に引用した「あとがき」にもあるように、古典文学や文献資料と口承文芸

研究を融合させようとした意図が出ている点で、非常に意義深い本になつていると考へる。評者も、口承文芸研究を軸に置きながらも古

研究を融合させようとした意図が出ている点で、非常に意義深い本になつていると考へる。

IIIは、前章までに入らない以下のようないい論文から成る。

「さかさ語り論」は、主に座頭によって語られたさかさ語り（早物語）を取り上げ、さかさ語りは、単なる滑稽な語りというだけでなく、ありえないことが起こり得るという奇瑞を語る信仰的側面もあるとする。また、現代の中学生や海外でも行われていることを紹介しながら、教育的配慮のある通過儀礼の文學としての側面もることを指摘する。初出は、『古代文学講座3 都と村』（一九九四 勉誠社）。

「山口孫左衛門家の盛衰」は、『遠野物語』の「遠野物語」説などを評価したい論文として読んだ。

「遠野物語」の特徴が見えて来るだけでなく、再話や聞き書きの問題などにも思いを致せてくれる内容となっている。初出は、『遠野常民』第11号（一九九三 遠野常民大学）。方法の違いを明らかにしようとした論文。『遠野物語』の特徴が見えて来るだけでなく、再話や聞き書きの問題などにも思いを致せてくれる内容となっている。初出は、『遠野常民』第11号（一九九三 遠野常民大学）。

IIIは、評者なりに統一テーマを付けようとしましたが叶わなかった。一編一編はそれぞれ注目すべき指摘が散見するが、全体としてややつながりのつかみにくい章となっているように思われた。

「遠野物語」についても、ここに収めていない周密な研究があるので、ここでは禁欲的に盛り込まず、それらと一緒にするのも手だったかと思う。『遠野物語』が入るのと入らないのでは、購売力に大きな影響がある

のかも知れないが——。

もつとも、この『遠野物語』については、次には、これまで大切に育ててきた『遠野物語』の成立過程を、広く世に問うてみようか』([あとがき])とある。まずは、口承芸の文献学的研究の推進者の手になる本書がまとまつたことを喜び、今後の口承芸研究に、大いなる広がりがもたらされることを期

## 書評

中原ゆかり著

### 『奄美の「シマの歌』』

酒井正子

本書は奄美大島笠利町佐仁の集落(シマ)を対象とした、歌謡・芸能伝承の民族誌である。著者の中原ゆかり氏は一九八二年以来奄美大島全域をフィールドに、三昧線歌の現代的変化に関する民族音楽学的な論考を発表してきた。しかし個別のアプローチではとらえきれない「シマ意識と歌」という大問題に、学位論文(総合研究大学院大学、民博)として正面からとりくんだ意欲作が本書である。集中的な集落調査は八七〇九年に推定のべ十三ヶ月、うち初年度は七ヶ月間の長期滞在

待したい。

書評というより、新刊紹介程度しか書けなかつたことをお詫びし、読者諸氏には、直接手に取つて読まれることをお願いするものである。

(大修館書店・本体二三〇〇円)  
(ねぎしひでゆき／市川市中央図書館)

奄美のシマの小宇宙としての求心力が本書に結実したことを喜ぶ。

全体は八章及び結論からなり、核心である「八月踊り」には後半の四章を割いている。

第一章「序論」。問題の所在、研究方法と研究史、意義などが述べられる。まず、伝承歌

謡のエスノグラフィーを作成し「人々の心に存在する『シマの歌』を明確にする」ことにより「イメージとしてのシマを明らかにする」(一頁)という研究の目的が示される。シマとは生まれ育った故郷の村落・集落をさす。

伝承歌謡(いわゆるシマウタ)はシマごとに微妙な差異があるが、本書でいう「シマの歌」とは、

・歌を通じてシマを意識する概念(三頁)  
・シマ人たちが歌を通じて描くシマのイメージ(三六頁)

であるとして、実態(音響)としての伝承歌謡とは区別される。さらに、

・シマの歌という概念のうちには、自分たちのシマの歌を理想化するという心の働きまでがふくまれる。それは、常に自分たちのシマの歌が奄美の中心に位置し、なおかつ奄美で最も優れているというものである。

(七頁)